カメラルポ

防水に生きる（290）

"FRP防水"に惚れた

（埼玉県）

岩田 敏夫（53歳）
㈲イワタ 代表取締役

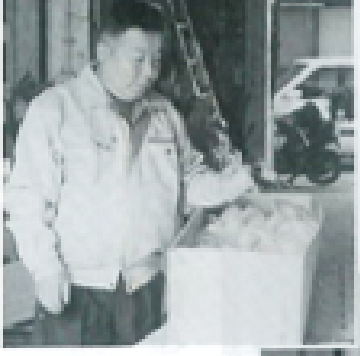
岩田さんは，約20年前に初めてFRP防水工法に出会った時から今日までFRP防水一筋に営業を展開してきた。「屋上・プール・浄化槽工事などが2割を占め，残りは木造住宅のベランダ防水工事がほとんどだね。FRP防水専門でやっているから，職人さんもFRPしか知らない。私も他の防水については何も知らないんだよ」と明るく笑う。

ざっくばらんな性格で「キドリは嫌だね」と言う岩田さんは，「えっとね～」「だけどさ～」と飾らない口調で話すが，防水のことになると語り口に力がこもる。「防水は下地造りと真心」と言う岩田さん。木造住宅のベランダ防水では，振動・木の乾燥などでコンパネの継手部分が一番動きやすい。「下地造りは大工さんの仕事ではあるが，コンパネは置いてあるだけと考えて，危ないところは自分で納得がいくまで直さなくてはだめだ」という岩田さんは，釘打ち・面木・サンダーがけなどの下地造りに3時間はかける。そのため，トラックの荷台に防水材料の他にコンプレッサー，不燃材，面木など大工の工具・材料を積んで出かける。大工さんの間でも「トラックの中を見ると，防水屋の道具だけでなく何でも積んである。あれだけ時間をかけて下地ごしらえからやる防水屋もないな」との評判である。岩田さん率いるイワタ防水が施工技術・技能に優れていることは，誰もが認めるところだ。

昨今では，住宅着工数の減少や単価の引き下げ要求などで経営環境は厳しくなってきている。こうした状況の中でも岩田さんは，「価格が折り合わなくて離れていったお客さんもいる。でも漏水のない確実な仕事をしていれば，半年なり1年経つとまた"現場をお願いします"とくる。よい仕事をしていればそうなるものですよ」と語る岩田さんの表情は自信に満ちていた。

修業時代は月給3千円也

「親のすねはガリガリで，そのうえ兄弟も多かったから，親の世話にならず一人で生活できる仕事に就きたかった」と言う岩田さんは，高校を卒業する



ＦＲＰドレンの製作をする岩田さん。「ドレンの製作は、雨の日は職人さんにも手伝ってもらってる。そのほうが職人さんの給料も安定するから」と言う。

哲也さんとプールの改修工事の打合せをする。「お互い頑固で会社を良くしたいという気持ちが強いから、時には喧嘩さながらの議論になることもある」そうだ。

工程表で仕事の進行状態を確認。

昼食の弁当・飲料缶などのゴミと材料の空缶などはすべて持ち帰り、分別・圧縮して廃棄物処理業者に処理を依頼している。

と食事付きの住込みで大工の修業をすることになった。「今とは貨幣価値が違うとはいえ，月給が３千円で作業ズボンを買うのが精一杯だった」と当時を振り返りながら，「４年後に独立して手間受けになると，やっと飲みに行っても平気になったよ。しまいには調子にのり過ぎて“ツケ”で飲み過ぎちゃった」と冗談まじりに話す。

「工務店時代は，ベランダ防水での雨漏りのクレームが多かった。そんな時にＦＲＰ防水の施工を見て“惚れた”んだ」。岩田さんは，こうしてＦＲＰ防水施工店に転業することを決断した。工務店にＦＲＰ防水を理解してもらうために，ライトバンにベランダの見本を造り，実際に施工をやって見せた。「実演することによって良い工法だと褒められはしたけど，すぐには受注につながらなかった。しかし，工務店時代の知り合いから徐々に受注が増えてきてね。オッカァと二人で朝６時に出かけ，帰りは夜の10時30頃。人の２倍も３倍も働いたよ」と言う岩田さん。妻のヨネさんと二人で手探りで始めた防水事業も，埼玉県の人口増加率が日本一（昭和60年から平成７年までの10年間で90万人増）という好条件もあり事業を拡大してきた。

しかし，すべてが順調だったわけではない。ＦＲＰ防水で施工した大宮市営団地の風呂場改修工事では，防水の立上りと既存の壁とのシーリング工事で苦い経験をした。「シーリング工事はもちろん初めてで，見た目には簡単に思えた。ところが，いざやってみるとなかなか難しい。結局，専門の職人さんに頼んで検査に合格したが，それまで団地の住民が風呂に入れず迷惑をかけてしまった。当時は仕事も軌道に乗り，少し蓄えもできた頃。気持ちに油断があったな」。この時の経験から，岩田さんは“ＦＲ

切断機を使用してガラスマットの切断をする岩田さん。

結露防止工事で折板屋根の上にＦＲＰ防水を施工し、仕上がり状態を確認する。

大宮市の事務所。１階がドレンの製造、２階が自宅、３階が事務所になっている。

工務店時代の岩田さん（写真中央）。

昨年の社員旅行で宮崎へ。

Ｐ防水専門”という独特の経営方針を徹底していく。

研究熱心でアイデアマン

同社の工事部門を担当している長男の哲也さんは，「父は仕事にはキビシイ人です」と言う。岩田さんは，段取りを非常に重視する。『大きな現場では，ガラスマットを敷く時に墨を打っておき，それを目安に敷けば曲がらない。極端な言い方だが，素人でもできるように仕事を分解してから組み立てていけば，施工管理とスピードアップができるんだよ』と，技術の差は段取りに表れると言う。

その合理的な発想は，ガラスマットの切断機やＦＲＰドレンの開発に生かされている。「車に積んで車の中で作業できる切断機は，荷下しの手間を省けるだけじゃなくて，ガラスマットのチリが飛ばないし，外で防水シートを使用して切るのと比較して３倍のスピードはあるね。またＦＲＰドレンは，塩ビ管との接着面積を多くし，外れないように工夫した」。このように，綿密な計画を立て製品改良を重ねてきた岩田さんは，「これからも現場の経験と勘を生かしてドレンに代わる新たな製品を開発していきたい」とやる気をみなぎらせていた。

岩田　敏夫氏（いわた・としお）

昭和19年６月２日生まれ，新潟県十日町市出身。㈱埼玉県技能士会理事。

大変な酒豪で，飲み出したらピッチが早い。「酒は強いよね。若い頃は一晩でビールを24本飲んだ。でもね，毎日飲むわけでなく週に２日は酒を控えるよ」という岩田さん。飲むときは徹底しているが，二日酔いで仕事を休んだことはない。